

第1回FD研究会
初年次教育

2008年5月14日(水) 文責 達富洋二

初年次教育について、「初年次教育」担当の達富から以下のような話題を提供し、意見交流を行った。

話題提供

達富： 高等学校から大学につながる期間の教育については、「入学前教育」「導入教育」「補習教育」「接続教育」等の様々なとらえ方がなされている。

きょうの研究会では、資料の通り「FD等に関する学長諮問委員会」における諮問事項について、本学の初年次教育実施に向けて、内容の検討を行いたい。

話題提供者としては、初年次教育を、各学部・学科の専門分野に特化したものではなく、全学部共通の「学びの導入」を図ることを目指した教育内容にしたいと考えている。大学全入という背景からも、その必要性を感じている。

配付資料の冊子『知へのステップ』（学習技術研究会）を参考にして、忌憚のないご意見を伺いたい。

意見交流

室員： 社会福祉学部では、学部共通テキストの作成を検討している。今後、FDでのテキスト事業との兼ね合いが必要となろう。

室員： この冊子の内容なら、社会学部でも使用可能だと思う。

室員： この冊子は、4回生や通信教育部生に対して読ませてみても価値がある。

室員： この冊子のタイトル名では、どういう中身かが瞬時に分かりにくく、あまり適切に思えない。これならば、タイトルを「初年次教育ガイドブック」と変更し、全学共通のガイドラインにすべきであろう。

また、常々思うことだが、理学療法士を志す学生に対し、入学前の面接実施が資質面を測る上で必要と感じている。

室員： 「日本語文章表現」との授業の兼ね合いでみると、このテキストは適切に思う。
(第3・4・8・9章)

なお、他大学では、「友人の作り方」も初年次教育の一環とし、3日程度の合宿を実施するケースもある。

達富： もし、本学でこの種のテキストを独自作成しようとした場合、教授法開発室が主体となるべきだと思う。

室員： 予算面についての十分な考慮が必要となる。その点について客員の考えはどうか。

室員： テキストについては、とりあえず1年目は既存の冊子を使用し、2年目以降、

原稿が揃い次第、独自テキストを作成する流れにする。そうすれば、予算面はクリアできるのではないだろうか。

第1回研究会では、初年次教育についての個人の考えを聞き合い、意見交流を行った。初年次教育についてのとらえ方も多様であることが分かるとともに、本学で取り組むにあたって留意しなければならないことがらも明らかになった。

まとめ

本学においても、初年次教育に取り組み、定着を図ることが求められている。実際に初年次教育に取り組むにあたって検討していかなければならない点は以下の通りである。

- (ア) 学生の学習づくりを目的とするのか、学生の仲間づくりを目的とするのか。両方か。
- (イ) 全学的に共通する取り組みとするのか、学部学科の特性に準拠した取り組みとするのか。
- (ウ) どの科目において行うか、複数の科目群として行うのか
- (エ) 市販テキストを用いるのか、自学開発教材を用いるのか。

これらの点について具体化した計画を立てることが今後の課題である。

参考

2009年3月に開催される「2008年度第14回FDフォーラム」における「初年次教育」分科会のテーマ（記述：達富）は以下の通りである。

テーマ：「初年次教育の展望と課題」

初年次教育に取り組み、定着を図ることが求められている。初年次学生の資質や能力の傾向が従来とは異なってきたからである。

このことは、「授業を運営していくにあたって、教員の教授法をどのように改善するか」という問題とは別の問題である。

「学生の学習づくりを目的とするのか・学生の仲間づくりを目的とするのか」「全学的に共通する取り組みとするのか・学部学科の特性に準拠した取り組みとするのか」「どの科目において行うのか・複数の科目群として行うのか」「市販テキストを用いるのか・自学開発教材を用いるのか」など、要検討のことがらも少なくない。

本分科会では、初年次教育を導入している大学、あるいは導入を検討している大学に共通する問題点について事例を通して考察を図りたい。